

武蔵野交配

カボチャ

ゆめ

ろ

まん

夢浪漫

貯蔵性・収量性に非常に優れ、
着果と果揃いが良い中晩生種





武蔵野交配

カボチャ

ゆめ ろ まん
夢 浪 漫

抜群の収量性と貯蔵性で、歩留まりに優れる。

特性要約

ハウス・露地・抑制栽培と適応作型が広く、
整枝・無整枝栽培どちらも安定した高収量が得られる。

特性

- 成熟日数は50日の中晩生タイプ
- 貯蔵性に優れ、腐敗果の発生は非常に少ない。
- 着果性（1蔓2果着果）・果揃いに優れ、収穫果数が多く収量性が高い。
- 果重は2.0～2.3kg前後で果形は扁円球。
- 草勢は強く、蔓伸びが良い。葉柄は短く、葉折れしにくい。
- 病気に比較的強く、栽培後半まで葉の残存率が高い。
- 肉質は粉質で、糖度が高く食味に優れる。
- 低温時の花粉の出に優れる。

栽培の要点

- 播種育苗**：発芽温度は26～28℃。播種は種子を土に対し水平にし（種子の尖った部分）、発芽予定日の4日前の夕方に播種する。本葉1枚展開後は地温18～20℃で管理する。定植前に苗の順化のため、地温を13～15℃位まで下げ、昼間の気温は20～25℃、夜間の気温は8～10℃で管理する。35日で本葉4枚が展開する苗を目標に育苗する。
抑制栽培では、本葉1.5～2.0葉期に、日長8～9時間の短日処理を行い、雌花分化を促すことが理想である。
- 施肥**：基肥は10a当たり成分量で窒素12kg、リン酸20kg、カリ15kg程度が標準であるが、土質や前作の残効により異なる。また、有機質・石灰質資材の投入は不可欠であるので、10a当たり堆肥は1000kg、石灰は100kg施し、土壌pHは6.0前後が理想である。追肥は着果確認後、10a当たり窒素成分で3kg施す。

- 定植**：定植時の最低地温は15℃以上を目標とし、マルチ等で地温を確保する。定植後、最低気温は10℃を確保し、28℃を目標に換気する。
- 栽植距離**：
親つる1本仕立て：畝幅3.0～3.5m、株間45～50cmを標準とする。
子つる2本仕立て：畝幅3.0～3.5m、株間60～70cmを標準とする。
- 着果・整枝**：2本整枝の場合、子蔓が15～20cmほど伸長したら、良好な2蔓を残し他は除去する。着果節位は10節前後～15節程度で着果させ、それまでのわき芽は早めに除去し、雌花の充実をはかる。株元の雌花は摘果する。（株元着果の果実は果形が乱れやすいため）
- 収穫**：開花後およそ50日頃、積算温度約1000℃が目安。果皮が艶のある濃緑色からややくすんだ濃緑色に変化した時が収穫期になる。その他に、果梗がコルク化してきたことやグランドマークの緑が抜け黄色くなっていることを確認する。収穫は晴天日を選び、朝露が乾いてから行う。
- キュアリング・風乾**：風通しの良い日陰で行う。カボチャはパレット等の上に置き果梗の切り口が乾くまでは、果梗の上にカボチャを置かない。キュアリングの処理条件は温度25℃以下、湿度70～85%、通風ありとし7～10日ほどで果梗の切り口が乾く。貯蔵は温度10～13℃、湿度70%以下で通気の良い場所で保管する。
- 病虫害防除**：アブラムシとうどんこ病対策を行う。
うどんこ病は着果後草勢が弱ると出てくるので、着果ごろから薬剤による予防を行う。
台風後など葉が痛んだ後は、殺菌剤で病気が広がらないように予防する。

栽培上の注意点

草勢強く蔓伸びが良い品種なので、過度の密植栽培は避ける。
2番果まで着果することが多いので、1番果と2番果を適期に分けて収穫を行う。早どり（未熟果）は貯蔵性・食味が悪く、遅どり（過熟果）は果皮の変色が早く貯蔵性が低下する。

作型	地域	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
トンネル 露地栽培 露地抑制	冷涼地				●	×	—	—	—	—	—	—	—
	高冷地						●	×	—	—	—	—	—
	中間地	●	×	—	—	—	—	—	●	×	—	—	—
	暖地				●	×	—	—	—	—	—	—	—
ハウス抑制	中間地								●	×	—	—	
ハウス促成	暖地	●	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

作型表の見方 ● 播種 × 定植 ■ 収穫期